

會へ持ち運び任意に共進會場内に配置せしむ、かくて「お客様のお來場を待ち合しむ。大兒には人の形より袴を折らしめお客様のお所へ持ち行き糊を用ひてお客様に穿かしむ、(第四圖)着せしめたる後は隨意に會場に赴かしめて中兒と共にお客様の入場を待ち合す。

5. お客様は小兒之れを持ちて「オルガン」に合せ

『ジエーン・アイア』(五)

|| 英文學に現はれたる子供(十六) ||

て行進し、會場内椅子を配置せる所に赴きてお客様を椅子にこしかけしむ。

6. 全兒共進會外に、一列圓形を作りて「オルガン」に合せて共進會落成の唱歌を歌ひ、次に共進會萬歳お客様萬歳松の組萬歳と唱へて式了る。

7. それより全兒間隔を取りて體操をなす、主として胸の運動をなさしむ(凡五分間)

岡 田 み つ

「プロックルハースト」さん、三週間前に上げた手紙に申上げたと思ひますが、此子はどうも私の望むやうな氣質きだてではありませんから、もしローウツド女學校へ入學させて下さる場合には、校長さんと教師方とに厳しく監督をして頂きたい

ので、別けて此子の一番悪い缺點の、表裏へうりのある癖を御注意下さるやうに願ひます。ジエーン、御前が此方を瞞たましたりしない爲に、態とかうして御前のまへで御話して置くのだよ。

ジエーンが、リード夫人を怖れ且憎むのも無理

はなかつた。ジエーンを慘酷な目に遇はずのが、夫人の性分なのだから、ジエーンは夫人の前に居て、楽しいと思つた事はなく、いくら細心に其命をき、いくら御機嫌を損せまいとしても、ジエーンの努力は反撥つけられ、今のやうな語で報いられるのであつた。見ず知らずの人の前で此非難を、ジエーンは心を剝られる思ひで聞いた。今入らうとしてゐる新生活に、もう希望を絶たせるやうに、伯母が仕向けて居るのが、ジエーンにも薄く覺られた。伯母は、自分の行先に嫌疑と不親切との種を播いてゐるなと感じた。ブロックルハーストの目前で、自分がわるがしこい、小悪らしい少女にされてしまつたのが解つた。此損害を除くにどうしたら宜からう。ジエーンは、泣き聲を抑へ、涙をいそぎ拭きながら、「方法はない」と心に思つた。

「表裏のあるのは、子供としては重大な缺點です。表裏のあるのは虚偽と同じで人を欺くもの

は未來にいつて、火と硫黄の池に行く事になつてゐます。兎に角、此子はよく監督いたしませう。校長にも教師達にも申して置きます」。

「どうか、將來の身分相當に御教育下さいませ。物の役に立つて、而して増長いたしませぬやう。休暇の節も、御差支なくば、やはり學校に置いて頂きたう御坐います」。

「御取り定めになつた事は、一々御尤と感服いたします。卑下、謙遜は信者たるもの、持つべき徳で、特にローウツド女學校生徒には大事な點ですから、私は此徳の養成に専ら努力して居ります。生徒が傲慢の心を起さぬやうにする方法を、随分研究して實行して居りますが、効果を奏したらしい證據をつい先頃得ました。私の二番目の娘が、母親に連れられて、ローウツド學校を觀に參りましたが、歸宅して、かう申すのです「御父さん、あの學校の生徒は何て大人しくて質素なのでせう。髪を引詰めて緒つて長い

前掛けをして、着物の外部に衣囊が付いてゐて貧民の子供のやうであつたわ。而してね、皆で母さんや、私の着物を見るンですもの。絹の着物なんか見た事も無いらしいのよ。」

「そういふのが何より結構なので、とリード夫人は答へた。「イギリス全國を探したつて、之程ジエーンに持つて来いといふ學校は、とてもありますまい。釣合といふ事が大切だと私は思ひます、何事にでもね。」

「釣り合といふ事は、信者の第一に心得て居るべき事で、ローウツド學校では、此點に注意して萬事を致して居ります。淡泊の食物、簡単な衣服、純清の住居、剛健勤勉の氣風と申すのが、學校の日課となつて居ます。」

「結構です事。それではどうか此子を入學させて下つて、身分によく釣り合ふやうに御教育下さるやうに願ひます。」

「承知いたしました。此子を御預りしますが、此

子は勿體ない程幸福な境遇に置かれる事を、十分有り難いと思つて貰いたいものです。」

「では、成可く早く此子を遣ります。面倒なこの責任を早く逃がれたいと、實は私も願つて居るのですから。」

「御尤です。では御暇いたします。一二週間の中には歸宅いたしますが、何時御遣しになつても差支ないやうに、校長へ宛て、新に入る子がある旨を知らせて置きます。失禮いたしました。」

「さやうなら。何卒奥さん、御嬢さん達、坊ちゃんにも宜しく。」

「畏りました。おい——此處に「子供の手引といふ本がある。よく祈禱をしてお読み。其中にも虚言者のマーサといふ子供が、不意に死んだといふ話の處をな。」と言つて、ブロックルハースト君は、ジエーンの手に薄い小冊子を渡し、馬車を呼ばせて、歸つていつた。

リード夫人とジエーンと二人限りになつた。暫時は双方とも無言で、夫人が縫物をしてゐるのを、ジエーンは七八尺隔て、小さい腰掛に坐つて、つくづくとその身體の格好を見、容貌を観察してゐた。ジエーンの手には、虚言者が急死した事の書いてあるその小本を持つてゐたが、心には今迄目前に起つてゐた事、リード夫人が自分の事についてプロツクルーストに言つた語、二人の對話の調子などがまだ新で、心は生身が出たやうにヒリヒリ痛んで居た。あの一言一言はジエーンの耳に入ると同時に、その胸をヒシヒと刺したのであつたが、今や怨恨の情が油然と湧き上つて來た。リード夫人は顔を上げた。其眼がジエーンの眼に行逢つた途端に、裁縫の手は御留守になつた。夫人は、

「彼方へ御出で。子供部屋へ御歸り。」と命じた。ジエーンの顔付きだか何だか、ひどく氣に障つたものらしく、夫人の其言振りは、肝癢を無理に

抑へたといふ風であつた。ジエーンは、立つて戸口へ去つたが、再び戻つて、窓の方へ行つて、更に部屋を横切つて、夫人の間近へ進み寄つた。「是非言つてやらなければならぬ。あんなに亂暴に踏み付けにされたのだから、是非逆捻をしてやらなくてはならない。併しどういふ方法でしやうかこの敵に遣返返しをする力が、自分にあるか」と思ひながら、ジエーンは満身の力を込めてぶつ切り棒の言語で述べ出した。

「私は、虚言者ではありません。若しさうなら、伯母さんを好きだつていふでせうが、私はちつとも好きではありません。世界中でジョンの次に伯母さんが一番嫌い。虚言者の此本は、あなたの子のジョージアナに御やりなさい。あの子が虚言をつくので、私ちやありません。」

リード夫人の手は、縫物の上に靜に休んでゐて、氷のやうな眼は冷やかに、ジエーンを熟視してゐる。

「その他にどういふ言種があるのだへ」と夫人は尋ねた。その調子は、子供に對つて普通使ふやうなものでなく、夫人が喧嘩の相手にいふやうであつた。夫人のその目、その聲がジエーンのあるかぎりの嫌忌の情をそくり立てたので、ジエーンは身體を震はせながら、抑へ難い激昂に驅られて、

「あなたが私の血統ちゆうとでなくつて、眞に嬉しい。生きて居る限り、二度と伯母さんなんて呼ばないから、さう思つていらつしやい。私や大きくないつたつて、逢ひになんか來るものか。人がもしあなたを好きだつたかとか、あなたが可愛がつてくれたかとか、尋ねたら、あなたの事を思ふだけで胸がわるくなるつて言つて、而して非道い目に逢はされたと言つてやる。」

「何處に證據があるへ」

「どこにつて！事實ほんとですもの。あなたは情つてものがない。私には、慈愛親切なんていふものは不必要だとあなたは思つて居るのですが、私に

や其では生きて居られません。あなたは感みなんてものもない。あなたが私を押込めたのを、手荒く亂暴にあの赤室へ入れて、閉ぢ籠めて置いた事を、一生、死ぬまで覚えてゐる。私が辛くて、堪へかねて、泣いて、勘忍して下さいと頼んだのに。しかもあんな目に逢はせたのは自分の子が私を打つたからなんで、理由わけもなしに私を打仆したからなんだ。きく人があつたら、その通りを話してやる。世間の人は、あなたを善い人だと思つてゐるけれど、あなたは悪いわるい酷い心の人だ。あなたこそ虚言者うそつきだ。」

と述べ立てゝゐる中に、ジエーンは今まで經驗した事のない自由勝利などの念が出で、精神が伸々として欣喜の情に堪へられなかつた。何だか目に見えぬいましめの繩が解けて、思はぬ自由の域に脱出したやうな氣分であつた。その氣分も萬更ら據り處の無いでもなかつた。夫人が恐れ怖ぢて、縫物を膝からこへり落とし、手を差し上げ、身を

揺ぶりながら、泣きさうな顔をしてゐたからである。

「ジエーン、御前は考へ違ひをしてゐる。どうしたの。何故そんなに震へてゐるのさ。水でも御飲みでないか。」

「いりません。」

「何か欲しいものはないかへ。私は、御前の爲を思つてゐるのだよ。」

「そうではありません。あなたはブロックルハーストさんに、私は悪い性質で、表裏があつて言つたではありませんか。あの學校へいつて、皆に、あなたがどんな人間で、どんな事をしたか知らせてやる。」

「ジエーンや、御前にはそういふ事は解らないのだよ。子供は、悪い事があれば、矯なほさなければならぬものだからね。」

「表裏をするのは私の缺點ではありません。」
とジエーンは、激烈な高調子で怒鳴つた。

「御前は感情が強い、それは御前だつてさう思うだろう。さあ子供部室へ御歸りーい、子だからねー而して少し横になつて御いで。」

「私や、あなたのいゝ子ではありません。横にもなりまん。此處に居るのは厭ですから、早く學校へやつて下さい。」

「そうとも、直きに學校へやるさ」と小聲でリード夫人は言つて、縫物を纏めて、急いで部室を出ていつてしまつた。

ジエーンは、獨り残された勝利を得て。之はジエーンの最奮闘した戦で、又初めて博し得た勝利であつた。ジエーンはブロックルハースト君が立つてゐた敷物の上に、暫時立つて、勝利者としての誇りを獨り味つた。初めは莞爾じょんじょして思ひ上つた風情でゐたが、その激烈な歡喜は、急速であつた脈搏が静まると同時に消えてしまつた。子供は大人と争ひ、しかもこの少女の如く猛烈な感情を自由自在に働かせた揚句は、その反動で、興が覺

めて悔恨の心を起こすは必然である。ジエーンは、三十分も黙つて考へたまには、自分の所行の狂氣染みてゐたのに心付き、人を憎む我心、我身の上のわびしさをつく／＼感じ、夫人の所へ詫に行かうかとまで思つたのであるが半は経験から、半は本能的に、そういふ仕打は、ます／＼夫人を厭がらせ、従てジエーンの亂れ心をまた／＼激させる事になると考へた。ジエーンは、荒い物の言ひやうを止め、憤怒などいふ恐ろしい情を捨て、心を他に轉ずる術が欲しくなつた。やがて一冊の本をとつて、坐に着いて讀まうとしたが、自分と頁との間に、心の中の妄想が往來して、一向に意味が取れなかつた。ジエーンは、ガラス戸を明けて見た。樹立ちは音もなく、霜は地に充ちて、日も當らなければ風も吹かない。着物の裾を捲つて頭から被ぶり、ジエーンは庭の方へ歩み出した。音もせぬ樹々、落ちる椏の毬果、秋の名残りの赤枯葉の氷り付いたのなどは一向に慰めにならなかつた。

ジエーンは、門に倚つて空漠の野邊を見渡した。羊は一匹も居らず、草は霜にあてられて白くなつて居た。灰色をした日で、雪もよいの曇つた空が萬物の上を被ふて、時々雪が落ちてカチ／＼の徑路や白い牧場に溶けもせずに落ち積もつた。この中に獨り佇立して「如何しやう、如何しやう。」と小聲に囁いてゐるジエーンは、實に哀れな少女であつた。

忽ち澄んだ聲がして、
「ジエーンさん！何處にいらつしやるの。御飯ですよ。」ベシーの聲なのはよく承知して居たが、ジエーンは身動きもしなかつた。ベシーは軽い足音で、小路をやつて來た。

「いけない御子ですね。何故呼ばれたら、直ぐいらつしやらないの。」

ベシーは例によつて少し腹を立てゝゐたのだが、ジエーンが今迄思ひ耽つてゐた思想に比べれば、陽氣な愉快なものであつた。ジエーンは、リード

夫人と言ひ合つて勝つたのであるから、乳母の一時の立腹なんか心にも留めぬ風で、却て乳母の氣輕の氣分に浴しやうとベシーに縋り付きながら

「さあ、ベシー、叱つちや厭だよ。」

その素振りが、いつに似氣なく、怖ぢる風がなく、無邪氣だつたので、ベシーはやゝ機嫌を直して、

「あなたは妙な方ね」と見下しながら「獨りぼつちの風來人で！學校へ御入りになるのでせう。

ジエーンは頷いた。

「ベシーを置いていらつしやるのは、御厭でせう。」

「ベシーは私を可愛がりもしないで、始終叱つてばかり居るくせに。」

「でもあなたが妙に人に怖ぢて、はにかみなさるからですよ。もつと氣を強くなさいましな。」

「もつと打たれるやうにツて？」

「とんでもない！ですが、あなたは全く虐められ

ていらつしやる、それは確ですね。私の母が先日私を尋ねて來ましてね、自分の娘を、あなたのやうな身の上にしたくないツて申しましたよ、さあ、いらつしやい。宜い事を聞かせて上げやうと思つて、御迎に來たのですの。」

「虚言だらう。」

「まあどうしてそんな事を仰るの。何といふ悲しさうな目付をなさるのよ。御聞きなさいませ。

奥様も、御嬢さん達も、坊ちゃんも、御晝後に御茶に招はれて御出掛けになるのですから、あなたは私と一所に御夕食を召し上ねね。料理番に頼んで御菓子をこしらへて貰ひませう。それからあとで、あなたの抽出しのを片付けますから、手傳つて下さいましな。ちきに、あなたの御荷物に詰めなければならぬですよ。奥さんは、あなたを一日二日の中に此處をば立たせなさる積りなのですから、どの玩具をもつていらつしやりたいか、御自分で御撰りなさい

ませ。」

「ベシーや、私の行く日まで、もう叱らないと約束しなくてはいいや。」

「約束いたしますよ。あなたも大人しくなさらくつては駄目。而して私を恐がつてはいけませんよ。私が思はず叱り付ける時など、吃驚りなさるなよ。あれは眞實ほんとに腹が立つのです。」

「もう御前を恐いなと思はないよ。馴れてゐるもの。之からは又大勢知らない恐い人が出来るのだ。」

「あなた恐がりなされると、人が嫌ひますよ。」

「御前見たやうに？」

「私はあなたを嫌ひではありません。此家こゝでは一番私があなたを可愛いがるでせう。」

「でもそんな風を見せないね。」

「まあ随分御伶俐りじょうね。而して御話しなさり方が變りましたが、如何して大膽に平氣に御なりなすつたの。」

「もうちきに御前に別れるのだもの。而してね」

とジエーンはリード夫人との間に起つた事を話さうかと思つたが、考へ直して、打明けぬ事にした。

「而して、私に別れるのが嬉しいからでせう。」

「そうではない。ほんとは、今の處、まあ嫌いやなの。」

「今のところ！まあ厭いやなの！何といふ冷淡な言ひ方でせう。では今接吻して下さいませと申したらまあ止ませうと仰るでせう。」

「いゝえ。よろこんで接吻するよ。もつと御屈ごくみ」

ベシーは身を屈めて、接吻をうけた。やがてジエーンは、すっかり好機嫌になつて、ベシーの後から家内へ入つた。その午後は平和に過ぎた。夜は、ベシーが殊更面白い話をしてきかせ、殊更美しい歌を唱つてくれた。ジエーンの身の上にも、たまには日光の射す事もあつた。

* * * * *

一月十九日の朝五時が鳴るか鳴らぬに、ベシーがジエーンの小室へ蠟燭を持って入つて來た。ジ

エーンは、ベシーの來る一時間も以前に、床を離れ、顔を洗つて、床の傍の細窓から差し込む入り方の目の光りで、着物を着たのであつた。ジェーンは、その朝六時に邸の門の前を通る驛馬車で、此處を出る事になつて居た。起き出たのはベシー一人で今彼女は子供部屋に火を焚いて、朝食の支度に取り掛つて居た。子供は旅行の矢先には氣せわしくて、物が食べられぬものであるが、ジェーンもその通りで、ベシーが用意してくれた牛乳とパンをいくら勧められても食べる事が出来なかつたのでベシーはビスケットを紙に包んで旅行囊の中へ入れてくれた。それから外套を着せ帽子を被せてくれて、自分もシヨールを身に纏つて、二人で子供部屋を出た。リード夫人の室の前を通りながら、ベシーは、

「入つて、さよならをしていらつしやいますか。」

「いゝえ。昨夜御前が御夕飯に下りていつてから伯母さんが私の寢てゐるところへ見えて、明日

の朝は私だの子供達を起こすに及ばないよ、而して私は始終おまへの爲を思つて、いろ／＼してゐたのだから、其を有り難く思つて、その積りで私の事を人に御話しなさい」と仰つた。「それであなた何と御返事なすつたの。」

「何もいはなかつた。夜着で顔を隠して、壁の方を向いてしまつた。」

「それは、悪いではありませんか。」

「少しも悪くはない。おまへの御主人は、私の爲を思つてくれはしない。私の敵だよ。」

「そんな事を仰るものではありませんよ。」

「その家に御別れた」と、ジェーンは、廊下から玄關の戸口へ出ながら言つた。

月は沈んで四方眞暗であつた。ベシーの下げてゐる提灯が、石段や小砂利道のすこし霜溶けて濡れてゐるのを照した。寒氣が骨に徹するこの冬の朝を、ジェーンは齒をガタ／＼いはせながら馬車道を急いだ。門番の宿に燈火が見えてゐたが、行

き著いて見ると、門番の妻がやつと火を焚き付けて居るところで、夜前送り出して置いたジェーンの鞆が繩繫がして戸口に置いてあつた。六時には二三分間があつた。其時刻が鳴つて、間もなく、車の音が遠くから響いて、乗合馬車の來るのが知れた。ジェーンは、戸口へ出て、馬車のランプが暗中をいそぎ近づくのを視てゐた。

「此御子さんは、御一人でいらつしやるのですか。」と門番の妻が訊いた。

「えい。」

「どの位あるところですか。」

「五十哩。」

「ずいぶん遠いのですね。奥さんは、そんな遠方へ一人で御やりになつて、御心配でないのですね。」

うか。」

馬車は止まつた。馬が四頭で、馬車の頂邊に御客が乗つて。車掌と馭者は大聲で、いそがせた。車掌が鞆を投げ上げ、ベシーの首に絶り付いてゐるジェーンを引放し馬車の中へ抱き入れやうとした時、ベシーが、

「よく氣を付けて上げて下さいよ」と頼んだ。

「承知〜」と車掌は答へて、戸をボタンと閉め、「よし」といふ掛聲と共に、馬車は動き出した。

ジェーンは、ベシーからも邸からも離れ、知らぬ、遠い、不氣味の土地へ、驅り立てられていつてしまつた。

これからジェーンが學校生活をする段になるのですが大分長くなりましたから一先之で筆を擱きます。